

ヴィゴツキー欠陥学に関する研究の動向と展望

岡花 祈一郎¹

Review of the researches about Vygotsky's defectology

Kiichiro Okahana¹

The purpose of the present article was to classify the researches of Vygotsky's defectology, and to review these works. Vygotsky's defectology has hardly ever been argued on education for handicapped children or special needs education. On another front, since 1980's, it has been few case to discuss about his defectological texts on the Vygotsky boom in Europe and the United States. There are some of following assignments ; which is hardly the researches to focus on a connection between Vygotsky's defectology and his Cultural-Historical ideas. It remains to be seen position of defectology on Vygotsky's theory overall. Furthermore, it is issues to explore the influence of the defectological research upon Vygotsky's ideas.

Key Words : L. S. Vygotsky, defectology, pedology, Cultural-Historical theory

はじめに

帝政期からソビエト期のロシアを生きたヴィゴツキー（Л.С. Выготский 1896-1934）は心理学のみならず多くの分野でその業績を残している。文芸批評，芸術心理学，発達心理学，教育学など多岐にわたっており，ロシア・ソビエトにおいて障害をもつ子どもの発達および教育に関する研究領域である欠陥学（дефектология）もそのなかのひとつである。

ヴィゴツキーの欠陥学に関する研究は，1980年代にはじまる欧米でのヴィゴツキー再評価の流れのなかでは，比較的見落とされがちな領域であるといえる。しかしながら，ヴィゴツキーの欠陥学研究は，その後のソビエト障害児教育にとって大きな影響を与えるものであった（Бейн, Власова, Левина, Морозова & Шиф, 1983）。その一方で，ヴィゴツキーの欠陥学に関する知見は，文化-歴史的理論として知られる一般心理学理論に関する彼の著作のなかにも

数多く散見される。このような点から，ヴィゴツキーの欠陥学研究は彼の諸理論全体をとらえなおす際の有効な手がかりになりうるものであると考えられる。ヴィゴツキー欠陥学に関するこれまでの先行研究を整理することは，今後のヴィゴツキー欠陥学研究のみならず，ヴィゴツキー研究全体への新たな視座を提示しうる可能性を有した作業でもあると考えられるのである。

本稿の目的は，ヴィゴツキーの欠陥学の業績に関する先行研究を整理し分析することを通して，その研究動向および展望を論じていくことである。以下では，まずヴィゴツキーと欠陥学の関係とその研究概要を簡単に整理した上で，ヴィゴツキー欠陥学に関する諸研究を検討していきたい。

欠陥学とは何か

Knox&Stevens (1993)によれば，「欠陥」とは19世紀後半のドイツにおける治療教育学からロシアへ導入された概念である。身体的，精神的疾患を抱えた人間を医学的に治療しようとし

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

て、ドイツでは「欠陥」を治療する学問領域として欠陥学やその関連施設が存在していた。

1917年の十月革命以前、ロシアではドイツをはじめとする西欧の治療教育や医学的療育の影響をうけた施設が数多く存在していた。身体的、精神的に何らかの問題を抱える者たちは、その施設に収容され治療という名目により医学的な観点から矯正的教育が行われていた。しかしながら、革命以前のロシアの欠陥学は身体的、精神的な疾患を抱える者だけでなく、知的な遅れをもつ者もすべて「異常児」としてその施設に入れられていた¹⁾。そのなかのひとつに、モスクワの「カーシェンコ欠陥児療養学校」がある。障害をもつ子どもの普通教育を提唱するカーシェンコが(1908年に)私設したこの治療施設の名に、ロシアで初めて欠陥学という用語が用いられた。カーシェンコはこの用語を身体的・心理的発達の遅れをもっている子どもたちの状態をしめすものとして使用した²⁾。この時期の欠陥学は身体的、精神のおよび知的な障害の区分すら不明確であり、障害者の権利も未だ保障されていない時期であった。

十月革命後、ロシア・ソビエトの欠陥学研究は新たな問題を抱えることになる。当時のソビエト期のロシアは一次世界大戦、十月革命、内乱の余波により、家庭を失孤児、浮浪児の問題、さらには非行少年など反社会的行動を起こす子どもたちが大きな社会問題となっていた(McCagg, 1989)。このような問題に対して、教育人民委員部は1920年に、「第一回子どもの障害、犯罪、浮浪との闘いに関する全ロシア活動者大会」を開いた。この会議で、特に議論されたのが「道徳的障害」(моральная дефективность)と呼ばれる問題についてである³⁾。学校で規則を守れない子どもや、非行や犯罪を行う子どもたちは道徳的な感覚に障害を有しているとみなされ特殊施設、補助学校へ措置されることとなった。このように、革命後の混乱となか浮浪児、非行の問題は共産主義社会を構築する上で必須の課題のひとつとしてとらえられていた。

社会的混乱における浮浪児や非行の問題をその子どもの「道徳的障害」の問題としてとらえる見解に対して、社会的要因、社会的教育の問題としてとらえる観点が提示されるようになる。1924年、「第二回未成年の社会的権利保護大会」において、「道徳的障害」という概念に対する批判的議論が起こり、この大会以後「道

徳的障害」という用語は使用されなくなる(渡辺, 1996)。

さて、1920年代後半から1936年にいたる欠陥学の問題を取り扱う際にソビエト児童学との関係を抜きにして語ることはできない。1920年代後半から欠陥学は児童学に包摂されていくからである。児童学(педология)とは、一方で20世紀初頭における新教育運動の影響と、他方でマルクス主義を基礎とする学問への希求という狭間のなか、衰退していくソビエト教育学に代わって台頭してきた学問領域である⁴⁾。この児童学の一領域として欠陥学が位置づけられることにより、如何にして「困難」を抱える子どもを早期発見し教育するかという問題が議論されるようになる。すなわち、発達診断法や臨床方法など実践的側面に光があてられることになる。しかしながら、1936年の児童学批判により、児童学は全面的に排斥され、欠陥学も同様に批判の対象となるのである。

ヴィゴツキーと欠陥学研究

ヴィゴツキーと欠陥学との出会いは、1910年代までさかのぼらなければならない。1917年にモスクワ大学およびシャニャフスキー人文大学を卒業後、ゴメリで教員養成の大学校で教師を経験する。その傍らで、彼は実験室を準備し障害をもつ子どもの発達に関して幾つかの実験を行っていた。この時期の教育経験や、実験をもとにして行われた幾つかの学会発表が認められ、ヴィゴツキーは1924年にモスクワの心理学研究所に招聘される。あわせて、同年7月、教育人民委員部の欠陥学研究部門の研究指導員として研究をはじめている(Vygotskaia&Lifanova, 1999)。1925年には医学教育学研究施設内に異常心理学実験研究室が設置され、1929年には実験・欠陥学研究所が設立されヴィゴツキーは同研究所の研究員となっている⁵⁾。これがヴィゴツキーと欠陥学との出会いである。

ヴィゴツキーは、1924年、11月に「第二回未成年の社会的権利保護大会」において「身体的欠陥児と教育原理」という発表を行った。翌年に発刊された同題の論文はヴィゴツキーの欠陥学に関する最初の著作となる。以後、「欠陥児の発達と教育に関する言説」、「知的障害の問題」、「欠陥児の発達要因としての集団」、「重度欠陥児の教育」など多様な障害をもつ子どもに関する研究を残している⁶⁾。また、大井・渡辺(1975)によれば、1930年の『欠陥学の諸問題』誌にヴ

ィゴツキーは編集委員のひとりとして参加し、自ら2本の論文を寄せている。

他方で、注意しなければならないのは、障害をもつ子どもに関する言及はこれまで注目されてきたヴィゴツキーの一般心理学業績のなかにも多く散見されるという点である。例えば、ヴィゴツキーの1930年代における理論的主著『高次精神機能の発達史』においては、同時並行的に行われてきた欠陥学研究所の見が文化-歴史的理論のなかで説明され登場している⁷⁾。さらに渡辺(1996)が中心的に検討しているように『行動史試論』(1930)では、類人猿、人間の行動を検討するなかで、ヴィゴツキーは道具的行為に関する分析から障害をもつ子どもの文化的発達に関して示唆的な論点を提示している。このようにヴィゴツキーの著作からは、欠陥学という領域での活動のみならず、独自の文化-歴史的理論のなかで障害をもつ子どもの発達をとらえようとしていたことがうかがえるのである。

ソビエトでは1920年代後半から児童学とよばれる学問が発展してくる。子どもの総合的学を標榜する児童学は、当時の生理学、教育学、心理学などの諸理論の統合が目指され、多くの研究者が動員されていた。欠陥学も例外ではなく、この児童学のなかで接合されていくことになる。ヴィゴツキーも1928年頃から亡くなる34年まで児童学研究に多くの時間を費やしており、当時中心的な雑誌『児童学』の編集幹事を務めている。この児童学において、欠陥学領域に関する研究でヴィゴツキーは「困難児」(трудные дети)と呼ばれる子どもにおける発達と教育の問題について検討している(渡辺, 1993)。さらに、当時の大きなトピックの一つであった児童学的診断という発達診断についても論考を残している。このような児童学と欠陥学に関する研究はヴィゴツキーが亡くなる間際まで継続されることとなる。

ヴィゴツキーの死から2年後の1936年、共産党中央委員会の「教育人民委員部の系統における児童学的偏向」という決定により、児童学は全面的に排斥されることとなる⁸⁾。とりわけ、ヴィゴツキーが児童学における欠陥学的に行ってきた発達診断に関する研究は、障害児を恣意的に選別し、施設に隔離することを促進する役割を担ったとして激しい批判を浴びることになる(Колбановский, 1956; ザムスキー, 1977)。この児童学批判の文脈でのヴィゴツキーに対す

る批判に関しては議論の余地があるが(福田, 1987; 所, 1994)、この1936年の出来事が、その後のソビエト・ロシアでの評価にも深い影響を残すことになる。

このように、ヴィゴツキーは本格的に心理学研究を始める以前から欠陥学への興味を抱いており、37歳で亡くなるまで障害をもつ子どもの研究を継続して行っていたのである。

ヴィゴツキー欠陥学に関する先行研究の検討

ヴィゴツキーの欠陥学に関する主要な著作は『ヴィゴツキー著作集』第5巻に収められている。

1980年代以降の欧米におけるヴィゴツキー再評価の流れのなか、様々な教育プログラムやカリキュラムにヴィゴツキーの名前や概念が散見される一方で、ヴィゴツキーの欠陥学研究についてはさほど十分な検討が進んでいるとは言い難い。それはヴィゴツキーに関する主要論文を集めた“Lev Vygotsky Critical Assessments”全5巻のなかで、ヴィゴツキーの欠陥学研究に関する研究文献の特集が無いことからもうかがえるだろう⁹⁾。

他方、わが国ではヴィゴツキー欠陥学に関する研究は古くから蓄積されてきている。とりわけ、1971年から大井清吉らを中心とする東京学芸大学のメンバーらによって「ソビエト特殊教育文献を読む会(後にソビエト欠陥学研究会と名称変更)」が組織され機関誌『ソビエト欠陥学の研究』を発刊されてきた。そのなかでは、ソビエト欠陥学における主要論文の翻訳活動、『ソビエト欠陥学辞典』の項目の翻訳、欠陥学史における諸論文が掲載され研究の蓄積がみられる。とりわけ、1975年『ソビエト欠陥学の研究』第13号ではヴィゴツキーの特集が組まれている。

以下では、ヴィゴツキーの欠陥学を取り扱っている先行研究をいくつかの方向性に分類して検討していきたい。まず、歴史的研究として、ソビエトの欠陥学研究の歴史にヴィゴツキーを位置づけた研究として、ザムスキー(1977)やMcCagg(1989)、渡辺(1996)やKnox&Kozulin(1989)が挙げられる。特に、McCagg(1989)は西欧から導入された「欠陥」という概念が、十月革命前後を期にロシア・ソビエト社会へ融合されていく様相を詳細に検討している。Knox&Kozulin(1989)は、ヴィゴツキーが亡くなった後の、彼の欠陥学理論の継承に関して

考察を行っている。他方で、ヴィゴツキーの欠陥学研究はソビエト欠陥学研究に大きな功績を残すものであると高く評価されている（ザムスキー、1977；McCagg, 1989；Knox&Kozulin, 1989；渡辺, 1996）。また、ヴィゴツキーの研究は、その後のソビエト欠陥学研究に大きな影響を与えた（Бейн, Власова, Левина, Морозова & Шиф, 1983）。バインらは、ヴィゴツキーの欠陥学研究を振り返り、それ以降のソビエト欠陥学の方法論的基礎を築くものとして評価している。また、ヴィゴツキー欠陥学のなかでも児童学的な研究に焦点を当てた研究が挙げられる（渡辺, 1984；渡辺, 1993）。近年では、ヴィゴツキーと盲教育者であるシチエルピナとの往復書簡が発掘され、ヴィゴツキーの欠陥学理論構築の様相が少しずつではあるが明らかになりつつある（渡辺・高木, 2005）。これら歴史的研究の特徴としては、ヴィゴツキーの欠陥学研究をソビエト欠陥学の歴史的文脈に位置づけてとらえようとする傾向が挙げられるだろう。

次に、ヴィゴツキーの欠陥学研究の知見を援用した実践的研究について検討する。近年の特別支援教育における実証的研究の文脈でヴィゴツキーの名前が散見される。例えば、Jamieson (1994) は聴覚障害の子どもと母親との相互作用に着目し、障害を持つ子どもの潜在的能力にあわせた言語的働きかけ、非言語的働きかけについて検討している。またBerk&Winsler (1995) は、学習障害をもつ子どもにおける自己制御能力と自己中心的言語の関係についてヴィゴツキー理論を援用しつつ論じている。これらJamieson (1994) やBerk&Winsler (1995) の研究に共通している点は、今日の障害児教育、特別支援教育領域の知見を基礎として、ヴィゴツキーの諸概念を援用しつつ実証的方法論を採用し検討していることである。しかしながら、その着眼点は発達最近接領域や概念や母子間の相互作用論への帰着しており、ADHDの子どもの問題とされる自己制御能力とことばの機能に関してヴィゴツキーの内言理論のみをとりだしてきているにすぎない。いいかえるならば、ヴィゴツキーの障害をもつ子どもへの発達のとらえかたや、その他の状況をふまえることなく、ヴィゴツキーの一般的に知られているカテゴリーを用いて子どもの行為やデータの解釈にとどまっているのである。例えば、これまで頻繁に論じられてきた発達最近接領域の議論が挙げ

られる。子どもの現在の発達水準と、親や教師などより有能な他者の援助のもと達成可能な未来の発達水準との狭間を指し示すこの概念は、障害をもつ子どもの潜在能力に着目するものとして古くから注目されてきた（例えばArnold, 1985）。また、いかにして子どもの潜在能力を引き出すかという援助論を中心に議論がなされてきた（例えばBerk&Winsler, 1995）。Kozulin (1990) は発達の最近接領域の概念が障害をもつ子どもの発達における重要性和大人の援助について次のように述べている。「障害をもつ子どもにとってのこの領域（発達の最近接領域）の識別は、彼らの現実化された行為が一定程度制限されているという理由からも特に重要であると思われる。…中略…教育者はその領域の深さを診断し、大人の援助を徐々に減らしていき、障害をもつ子どもの寄与を増やしていくような活動の連続性を構築するのである」¹⁰⁾。このような発達の最近接領域の理解のもと、多くの実践的研究の理論的基盤として援用されている。ヴィゴツキー欠陥学と発達の最近接領域の概念との関連性やその概念整理すら十分にされていないまま実践的研究に援用されているのである。

また、近年の研究では、ヴィゴツキーの欠陥学研究とカウンセリング論に着目した研究がある。山崎 (2005) はヴィゴツキーの欠陥学に関する業績に着目し、そこから臨床的な示唆を得ようとしたものである。この山崎の研究は非常に興味深い試みではあるが、その内実は従来の力動的な精神分析理論をヴィゴツキーの概念で置き換えて説明しているにとどまっている。例えば言語の問題に関してはヴィゴツキー以外の多様な言語理論に依拠しており、具体的な事例を取り上げるに際してはヴィゴツキーの影すら感じられない。山崎の提示するカウンセリングの実際とヴィゴツキーの欠陥学をはじめとする発達理論の間に大きな乖離としているように映ってしまうのである。幾つかの問題点が指摘できるが、山崎 (2005) の試みようとした観点は、以下の点で大きな可能性を有しているといえる。それはヴィゴツキーの欠陥学をそれだけに限定せず、ヴィゴツキーの一般的発達論と関連づけて理解しようとしていること。さらには、ヴィゴツキーの臨床的経験に着目した点についてである。ヴィゴツキーの臨床経験は伝記的研究でも知られているように、晩年の研究活動において重要な位置を占めていたことが知られて

いる (Vygodskaja&Lifanova, 1999)。ヴィゴツキー欠陥学研究における臨床的経験 (児童学的臨床)、および、その経験が彼の発達論や思想に与えた影響に関しては議論されるべき論点だろう。

ヴィゴツキー欠陥学に関する研究の課題と展望

以上のようにヴィゴツキー欠陥学に対して様々な方向性からの研究が蓄積されてきている。そのなかでみえてきた課題点を整理しておきたい。

第一点目は、ヴィゴツキーの欠陥学に関する研究において未だ十分に検討されていない部分が存在している。例えば、最晩年、ヴィゴツキーは児童学において当時、必要性が叫ばれていた「児童学的臨床」として発達相談や発達診断を行っていたことが知られている (Vygodskaja&Lifanova, 1999)。とりわけ、発達の最近接領域の概念形成にはこの発達診断が大きな影響をあたえた可能性を示唆する研究も存在している (Бейн, Власова, Левина, Морозова & Шиф, 1983)。この点については、これまでのヴィゴツキー研究のなかでは触れられることが少なかった事実であり、このような教育実践および、臨床経験と彼の思想との関連性は未だ検討されているとはいえない。

第二点目に、これまでの実践的研究ではヴィゴツキーの発達論における一般的概念が、障害をもつ子どもの発達を説明する際の道具となっているだけであり、そこでのヴィゴツキー欠陥学との関連性が不明確である。例えば発達の最近接領域に関しては概念理解とその適応範囲に関していまだ論争が起こっている (中村, 2003; 神谷, 2004; 中村, 2005)。このような論争が起きるのも、欠陥学研究において発達の最近接領域における概念そのものの検討が不十分なまま、概念だけが一人歩きしている状況がその一因であると考えられる。今一度、その概念を整理する必要があるだろう。

第三点目に、ヴィゴツキー欠陥学を理論的、思想的に位置づける必要が挙げられる。しばしば、指摘されるように、ヴィゴツキーの1927年前後の論文には、精神分析学者アドラーの「補償」概念の強い影響がみられる (Knox&Kozulin, 1989; Van der Veer&Valsiner, 1991)。Van der Veer&Valsiner (1991) は、1930年代の論文にはアドラーの名や「補償」の概念がほとんど散見

されないことから、「一時的な傾倒」と見なししている。アドラーに対するヴィゴツキー自身の姿勢に関しては、当時のフロイト＝マルクス主義批判の文脈も踏まえて検討する必要があるが、ヴィゴツキー欠陥学の精神分析学受容の観点は議論されるべき点のひとつだろう。

第四点目に、ヴィゴツキーの欠陥学研究に関する歴史的な検討においては、全体性における理論的変遷にという観点からの十分な検討が進んでいない。渡辺 (1996) や Kozulin (1990) に共通して言えることは、ヴィゴツキーの欠陥学研究が文化－歴史的理論との関係のなかで論じられていないという点である。言い換えるならば、ヴィゴツキー理論全体のなかでの欠陥学の位置づけが不明確なために、ヴィゴツキー欠陥学の変遷や展開の意味を十分にとらえることができないでいる。

ヴィゴツキーの欠陥学に関する研究は、これまで一般心理学理論として理解されてきた文化－歴史的発達論の研究と同時並行的に行われていた。しかしながら、本稿で概観してきたようにヴィゴツキー欠陥学に関する研究では、「欠陥学研究」という枠組みのなかでのみ議論が展開されており、その分析対象となる著作も限定されている。ヴィゴツキーの欠陥学研究は他の心理学理論とも密接につながりがみられ、ヴィゴツキーの思想全体を読み解く上でも彼の欠陥学研究からのアプローチは有効な観点のひとつといえるだろう。

註

- (1) 十月革命のソビエトの障害児・者をめぐる問題に関してはザムスキー (1977), 333-432頁を参照。
- (2) ザムスキー (1997), 400-412頁。
- (3) 渡辺 (1996), 91-94頁。
- (4) ソビエト児童学の成立に関しては森重 (1986), Fradkin (1990), Van der Veer&Valsiner (1991) を参照。
- (5) ヴィゴツキーと欠陥学に関する歴史は、Леонтьев (1990), Vygodskaja&Livanova (1999) などの伝記的な研究を参照。
- (6) 本稿ではヴィゴツキーの欠陥学研究の内容に関して論じることが目的ではないため、多くは触れないでおく。ヴィゴツキー欠陥学の概略と解説としては Van der Veer&Valsiner (1991), 渡辺 (1982, 1996) が詳しい。

- (7) 『高次精神機能の発達史』の全13章構成のなか、第1章、第7章、第8章、第10章、第11章に欠陥学の知見がみられる。邦訳としてヴィゴツキー柴田義松監訳『文化的-歴史的 精神発達の理論』学文社、2005参照。
- (8) 共産党中央委員会決定「教育人民委員部の系統における児童学的偏向について」柴田義松ほか編訳(1976)、534-540頁を参照。
- (9) たとえば、欧米圏のヴィゴツキー研究の代表的論文を集めたLloyd, P. and C. Fernyhough. ed. Lev Vygotsky : Critical Assesments. vol. 1-5. London and New York. Routledge. 1999のなかにはヴィゴツキーの欠陥学研究はとりあげられていない。
- (10) Kozulin (1990), p. 202.

引用参考文献

- Arnold, P. Vygotsky and the Education of the Deaf Child. The British Association of The Deaf 9 (2). 1985. pp. 29-32.
- Бейн, Э. С. Т. А. Власова, Р. Е. Левина, Н. Г. Морозова, Ж. Н. Шиф. Послесловие. Л. С. Выготский. Собрание. Сочинений. т. 5. М. Педагогика. 1983. с. 333-342.
- Выготский, Л. С. Л. С. Выготский. Собрание. Сочинений. т. 5. М. Педагогика. 1983.
- ヴィゴツキーЛ. С. ヴィゴツキー柴田義松監訳『文化的-歴史的；精神発達の理論』学文社、2005年。
- Berk, L. E. and A. Winsler. Scaffolding Children's Learning : Vygotsky and Early Childhood Education. NAEYC. 1995. pp. 81-97.
- Fradkin, F. A. A Search in Pedagogics : Discussions of the1920s and Early 1930s. Progress Publishers. 1990.
- 福田誠治「ソビエト児童学の歴史と再評価——一九二〇年代児童学による子どもの発達論の研究——」竹田正直編『教育改革と子どもの前面発達』ナウカ社、1987年、349-376頁。
- Jamieson, J. R. Teaching as transaction : Vygotskian perspectives on deafness and mother-child interaction. Exceptional Children No. 60. 1994. pp. 434-449.
- 神谷栄司「ヴィゴツキーの発達理論をめぐって」『障害者問題研究』No. 32 (1), 2004年、80-86頁。
- Knox J. E. and A. Kozulin. The Vygotskian Tradition in Soviet Psychological Study of Deaf Children. The Disabled in the Soviet Union; Past and Present, Theory and Practice., ed. W. O. McCagg and L. Siegelbaum. University of Pittsburgh Press. 1989. pp. 63-84.
- Knox, J. E. and C. Stevens Vygotsky and Soviet Russian Defectology; An Introduction. The Collected Works of L.S.Vygotsky ; The Fundamentals of Defectology, Vol. 2. Plenum Press. 1993. pp. 1-25.
- Колбановский В. Н. О психологических взглядах Л. С. Выготского « Вопросы психологии ». No. 5. 1956. с. 104-113.
- Kozulin, A. Vygotsky's Psychology : A Biography of ideas. London. Harvester Wheatsheaf. 1990. pp. 195-238.
- Леонтьев, А. А. Л. С. Выготский. М. Просвещение. 1990.
- Lloyd, P. and C. Fernyhough. ed. Lev Vygotsky : Critical Assesments. voll-5. London and New York. Routledge. 1999.
- McCagg, W. O. The Origins of Defectology. The Disabled in the Soviet Union ; Past and Present, Theory and Practice. ed. W.O.McCagg and L.Siegelbaum. University of Pittsburgh Press. 1989. pp. 39-61.
- 森重義彰「ソビエト児童学台頭と『児童学批判』」小林登ほか編『新しい子ども学3. 子どもとは』海鳴社、1986年、165-200頁。
- 中村隆一「人間発達における階層-段階理論にかかわって」『障害者問題研究』No. 31 (2), 2003年、152-160頁。
- 中村隆一「発達の最近接領域と発達保障論にかかわるいくつかの議論」『障害者問題研究』No x. 33 (2), 2005年、154-159頁。
- 大井清吉・渡辺健治「ソビエト欠陥学の成立過程に関する研究 I - (1)」『ソビエト欠陥学の研究』13号、1975年、2-4頁。
- 大井清吉・渡辺健治・渡辺裕子・広瀬信夫「ロシア革命と障害児教育原理の確立」『日本教育学会大会発表要旨集録』第35巻、1976年、51-52頁。
- 大井清吉・渡辺裕子・渡辺健治・広瀬信雄「ソビエトにおける障害児の就学前教育に関する

- る研究『障害者問題研究』No. 12, 1977年, 72-77頁。
- 柴田義松ほか編『資料ソビエト教育学—理論と制度』新読書社, 1976年。
- シッフ, Ж. И. 著 山口薫ほか訳『精神遅滞児の言語と思考』教育出版, 1981年
- 所伸一「なぜ児童学はスターリンに弾圧されたのか」『教育史・比較教育論考』第17号北海道大学教育史・比較教育研究室編, 1994年, 57-68頁。
- Van der Veer, R. and J. Valsiner. Understanding Vygotsky : A quest for synthesis. Oxford. Blackwell. 1991. pp. 60-77.
- Vygodskaja, G. L. and T. M. Lifanova. Lev Semenovich Vygotsky. Journal of Russian and East European Psychology. vol. 37, No2. 1999. pp. 1-89.
- 渡辺健治・大井清吉「ソビエト欠陥学の成立過程に関する研究 I - (2)」『ソビエト欠陥学の研究』13号, 1975年, 5-8頁。
- 渡辺健治「ヴィゴツキー障害児発達論—その歴史的・現代的意義—」『ヴィゴツキー発達論集』ぶどう社, 1982年, 279-304頁。
- 渡辺健治「ソビエトにおける児童学批判の分析—教育困難児問題を中心に—」『東京学芸大学紀要』第1部第35集, 1984年, 191-207頁。
- 渡辺健治「ヴィゴツキーの能力論」『障害者問題研究』No.46, 1986年, 33-39頁。
- 渡辺健治「ヴィゴツキーの児童学構想—困難児問題を中心に—」『特殊教育学研究』30(4), 1993年, 11-22頁。
- 渡辺健治『ロシア障害児教育史の研究』風間書房, 1996年。
- 渡辺健治「ロシア」茂木俊彦・清水貞夫監修『転換期の障害児教育6—世界の障害児教育・特別なニーズ教育—』三友社, 1999年, 213-235頁。
- 渡辺健治・高木潤野訳「1920年代ロシア障害児教育の証言—Л. С. ヴィゴツキーと А. М. シチェルビナとの往復書簡—」『東京学芸大学紀要』第1部56集, 2005年, 293-307頁。
- 山崎史郎『児童青年期カウンセリング—ヴィゴツキー発達理論の視点から—』ミネルヴァ書房, 2006年。
- ザムスキー, X. 茂木俊彦ほか訳『精神薄弱教育史』ミネルヴァ書房, 1977年。
- ザムスキー, X. 小林はるよほか訳注「ヴィゴツキーと精神薄弱教育学」『障害者問題研究』No.1, 1973年, 86-92頁。